

依存症者とその家族への『アディクションカウンセラー』養成事業

東京ダルク支援センター

〒116-0014 東京都荒川区東日暮里 3-10-6

助成事業の概要

(実施目的、時期、内容等)

依存症とは、「薬物摂取のコントロール喪失」を本質とする疾患であり、世界的な診断基準にも記載されている精神的障害である。依存症者は飲酒や薬物摂取がやめられず年余に渡って苦しみ、家族も辛酸をなめる日々を過ごしている。彼らに対して相談や治療的な介入を行う職種を「アディクションカウンセラー」と称している。我が国では、地域保健や医療機関、福祉施設などで依存症者の相談や治療に携わる人々がこの役割を果たしていると言える。しかし、保健、医療、福祉、司法など背景にある考え方はさまざま、連携体制も整っているとは言いがたい。そこで、平成 23 年 4 月から平成 24 年 3 月までの期間において、毎月 1 回の研究会を実施してアディクションカウンセリングの技術向上および連携体制の強化を図りたい。内容は、偶数月にはさまざまな関連領域の専門家による講演会、奇数月には日常臨床で出会う困難例についての事例検討会を行った。

事業の成果

(目的達成度、得られた成果や課題、参加者の感想等)

講演会のテーマは「向精神薬乱用・依存の実態、ならびに乱用・依存者の臨床的特徴」、「リラプス・プリベンション・モデル」、「アタッチメント・トラウマの観点から見た物質依存症の理解と治療」、「痛みとアディクションについての私論」などア

ディクションカウンセリングに関わる先端的な動向について興味深い内容であった。講師は第一線の研究者、大学教員、NPO スタッフなどで、毎回平均 5 つ程度の質問やコメントがあり、活発なディスカッションになった。参加者は 25 から 50 名程度であった。

事例検討会は、日常の相談や治療的介入の中で苦労したり工夫を要した事例について、毎回 1 ～ 2 事例のプレゼンテーションを行い、それを参加者全員で議論した。事例は、回復支援施設、医療機関、カウンセリング機関などで勤務している。回復者スタッフ、精神保健福祉士、看護師、カウンセラーなどのさまざまな立場のスタッフから提出された。各施設が日頃の相談や治療的介入の中でどのような経験をしているのか具体的に理解でき、多施設の多様なスタッフから意見を聴くことができた。各施設の特性が事例を通じて具体的に把握でき、今後の連携や協力のためにも有益な機会になった。参加者は平均して 7 から 15 名程度であった。

さらに、講演会の記録を中心として冊子を作成し、それを関係者で共有することができた。科学的で高度な内容を含む講演内容を確認することにもなり、改めてこの領域の現状と展望を考えるためのよい資料になったものと考えられる。講演のみならず、この冊子の作成についてもお手を煩わせた各講師には心より感謝したい。

実施した上での課題としては、予算の想定に若干の変更があったことと、全体の連絡や運営の負担が一部の人に集中したことなどが挙げられる。しかし全体としては、以上のように充実した実り

の多い事業を実施でき、初期の目的を十分に達成できたものとする。

■ 今後の展開

(助成事業の成果や課題を踏まえた今後の展開等)

今回の助成によって、講演会や事例検討会を開催できたことは、我々にとって得がたい貴重な経験になった。今後は、さらに連携や協力の体制を構築し、アディクションカウンセリングに関する技能のレベルアップを図るために、相互の活動についてふりかえり、意見を述べあったり（ピア・レビュー）、より経験の深いカウンセラーからの指導を受けたり（スーパーバイズ）する機会をもち、依存症本人や家族の相談を受けることができるような体制を整備していきたい。